

記録
フィルム
カラー／37分
日・英語版

- 企画
文化庁
- 協力
東京国立近代美術館
岐阜県現代陶芸美術館
山口県立美術館
萩市
下瀬雄雄（写真）

スタッフ

- 製作
山本孝行
- 脚本・演出
村山正実
- 演出補佐
山田和広
- 撮影
村山和雄
山屋恵司
- 撮影助手
今野聖輝
新藤多門
- 照明
本橋俊男
- 照明助手
佐藤大和
- 録音
荒井富保
- 効果
帆苅幸雄
- タイトル
三井貴夫（菁映社）
- 編集
吉田栄子
- ネガ編集
加納宗子
- 選曲
山崎 宏
- 録音スタジオ
アオイスタジオ
- 現像
IMAGICA
- 語り
佐藤 慶

文部科学省特選 2004年教育映像祭最優秀作品賞・文部科学大臣賞
2004年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第6位

この映画は、重要無形文化財保持者（人間国宝）、十一代三輪休雪（みわきゆうせつ）（壽雪〔じゅせつ〕）の近年、作陶の大きな中心を占めるようになった「鬼萩茶碗（おにはぎちゃわん）」「割高台茶碗（わりこうだいちゃわん）」の制作工程に倣いながら、十一代の持つ萩焼のわざを映像で記録したものである。



萩焼は、文禄・慶長の役後、毛利藩の保護のもとに現在の山口県萩市に開窯され成立したと伝えられる。十一代三輪休雪は、三輪窯九代休雪堂の三男に生まれ、1927年兄の休和（三輪窯十代休雪）の指導のもと、家伝の伝統技法を修業。ここから長い修業の期間を経て、休を号して作品を発表するのは1955年（昭和30年）、45歳であった。

「茶碗といえば、井戸か割高台だが、自分は井戸をとらず割高台をとった」とのちに語っているが、まさに十一代休雪茶陶の根幹をなすもので、60年代から70年代に試みたろくろを使わず土を割り、削ぎ、削り貫いた作品は、自己の独創性を生かせるものだけを作る姿勢を端的に示している。そして、鬼萩である。荒砂と化粧として打たれた見島土（みしまつち）とがあいまって、厚くかけられた釉薬（休雪白）は造形的な迫力を生み出す。作風は、萩焼の伝統的な技法を受け継ぎながらも近代的な造形感覚によって茶陶の世界に新風をもたらすものであった。